

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アシナ・カクリ「涙のためのハンカチ」
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 25 : 89 - 104
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048249">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048249</a>
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



アシナ・カクリ 「涙のためのハンカチ」

橘 孝司 訳

國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

「えい！」トウーラはソファに勢いよく手袋を投げ捨てた。「あははは！ この世の中、何ごとも償わなくちやいけないのよ」

スピロスに異論はなかった。はやく帰宅して片付けつものりやつかいな訴訟書類を静かに読ませてもらえれば十分だった。

「あの女を覚えてる？」トウーラは冷たい反応をもともせず続けた。「ロドダフニ」のあの魔女のお婆さんよ。覚えてる？」

スピロスは、ロドダフニの魔女など覚えていない、まったく興味もない、と言った。

「まあ、どうして？ あの女のこと、何度も話してあげたのに。あのおかしな家、覚えてないの？ アテネに行く道の左手にある、松林に完全に埋もれた家よ。あそこに年取った魔女が住んでいて、わたしたちが子供のころ棒つきで追い回されたって話したでしょ」

「お前たちが我が物顔で跳び込んだ庭の主かい？ で、追い出されて腹を立てたんだっけ」

「状況がちゃんとわかってないのね。そりゃ確かに跳び込んだけど、向こうが庭を閉めきってたからよ」

「へえ」とスピロス。

「庭を閉めきってたということは老魔女ということ。浜辺一帯でひとつだけ影のある場所だった。海から上がつて他にどこへ行くこうつていうの？ 今じゃ、そばには《クラブ》のキャンプ場があるし、新しく木が植えてあって、テントや小屋やごたごたと並んでるけど、あの頃の浜辺は御柳（まがりやなぎ）とかひどく貧相な松があるきりだったわ。ただ蟬がとまってるだけでね」

「そうかもな。でも自分の庭を閉めきるのはその女の権利だろ。こっそり忍び込んだお前たちを追い出す権利だつてあるし。それにもう何年も経つのに悪意を持つてるつてのはどうかと思うよ」

「わたしが？ 悪意を持つてるって？」

「魔女の婆さんって言ってるじゃないか」

「ああ、でも悪意からじゃないわ。老いた魔女なのよ。ほんものの」

「庭から追い出したから？」

「それだけじゃない。いい？ まず第一にね、アギスニのお父さんをうまいこと離婚させて、自分が後釜に座ってから家族と縁を切らせたのよ。最後には土地の収穫一切合切を自分のものにした。若いうちから、そんな魔女だったのよ。」

次に、ある孤児を養女にして奴隷のように使ってきた。わかる？ タダ働きの仕事に縛りつけたの。そんなに長く虐め続けておいて、今も結婚を許さない。

三番目には、農園で働くかわいそうなパナギスの首根っこも締めつけてきたの。パナギスは去年肺炎を患ったので、入院費を貸してやるとか言って、借用書にサインさせたのよ。いい？ 二割の利子のよ！ 考えてみて。

他の武勇伝だって数え切れないくらい。例えば、ソルダトス医師が妹を殺害したなんて噂を広めたのもあの女。ちゃんと聞いてる？ 真正銘の魔女なのよ。

でも大丈夫、この世はすべて因果応報。そんなアドリ

アナ夫人の償いって、どんなものかわかる？」

「わからない」とスピロス。「それに明日にしてくれないかな。見ての通り、今は……」

「償いはね、義理の息子アギスの嫁よ！ ちょっと前に彼女と知り合ったんだけど、これがねえ！ アギスはここで掘り出してきたのかしら？」

「知らないよ。できれば今は……」

「さて、アドリアアナ夫人の義理の嫁がどんな人か教えてあげましょうか」

「けっこう！」

「いい？ 野生の女王そのものってとこね。ほら、歌にあるでしょ、浜辺に座って『白人の子供よ、おいで。串刺しにして喰ってやろう』ってやつ。まさにあの通りね。蛇のように丸くて黒い冷たい目をしてる。それとも蛇の目は緑だったかしら。とにかく、あの人は黒くて蛇のような目。そうして、大理石のように立って口を開こうとしないの。微笑むこともあるけど、ごくたまにね。皺が出ないようにしてるからだと思う。相手の金歯を数えるようにじっと見ているの。動き出すのは『興味ある』男性が目前に現れたときだけ。

彼女と一緒にパヴリデイスの喫茶店に座っていた時、

ヨルゴスが現れたから紹介してあげたの。そしたら、実業家って聞いた途端『ミスター、押しが強すぎますわ』って表情をするんだもの。死ぬほどのお笑いぐさってこのことね。明らかに、アギスとの結婚は人生の経歴のただ一段階と見てる。成り上がるためにどんな機会も見逃さないって鷹の目で探ってるわ」

「いろいろ言ってるけど」とスピロス。「要するにきれいな娘ってことだな」

「きれい？ ええ、たぶん乱視とかほかの視覚異常がある人にはきれいに見えるかもしれない。でも足首はほとんどないの。膝からくるぶしまで堂々と曲線なくまつすぐに下りてるんだから。ゾツとするほど！ でも以前はね、看護師だった」

「看護師か！」

「ええ。そこでアギスと知り合ったのね。アギスが潰瘍の手術をした病院で、シシーも看護師資格の実習をしたの。これでわかった？」

「いいや」スピロスは言った。

「あのね、ベッドに横になつてると、看護師の顔や手や背格好は見えるけど、足は低くてよく見えないでしょ。で、アギスは騙されたわけよ。可哀相にね。もっといい

運が待ってたはずなのに」

「ボクもね！」とスピロスはうなつた。「家で静かにさせてもらえない女と結婚したのは自分のせいじゃない」

「どう思う？」とトゥーラは考え込みながら「どうしてアギスとシシーがここに来たと思う？」

スピロスはため息をついた。ほかの対抗手段なし。

「アドリアナ夫人に事業を持ちかけるつもりなのよ。家をホテルにして利益を分け合おうという。ほら、この辺は観光客が増えてるでしょ。午後アドリアナ夫人と相談に行つたわ。もちろん夫人の家には泊まらない。医師せんせいの家いしに泊まるから。さて、相談の様子が想像できる？ シシーは絶対アギスに老魔女を説得する役を押しつけて、自分はただじっと相手を見ていたにちがいないわ。あの底なしの瞳で。まるでアドリアナの命があと何日残ってるか数えるように。ぶるるるる！」

アドリアナはたぶん断つたでしょうね。当然もっと大きな分け前を求めらるから。首を賭けてもいいけど、彼女は一晩中目を閉じると悪夢に襲われて、シシーに金歯を剥がされて売り飛ばされるのが見えたはずよ！ だってシシーはおろかだけど——おかしな名前からしてそうね——危険な女でもあるから。信頼できない人。あの家か

ら金を手に入れようという思いに凝り固まってるなら……アドリアナは一目見て分かったでしょう。自分と同じ穴に住んでるんだから。あははは。だから言ってるのよ。この世の中、全て償うことになるって」

「その通りだ」スピロスは出来るだけ自分を抑えていった。「さて、そろそろ仕事をさせてもらえないかな……」

二日後ロドダフニ警察署長ゲオルギツアス少尉はしかも面でデスクの前に座っていた。前には二通の書類。ひとつは手紙で次のように書かれていた。

拝啓 バドヤナキス殿

まずは貴兄が私どもの地方に赴任されたことにご挨拶申し上げます。加えて、お時間ある折にぜひとも拙宅訪問の光栄を賜りますようお願い申し上げます。貴兄の御同僚ソルダトス氏に関する若干の事柄をご報告するのが私の責任と考える次第です。

敬具

アドリアナ・ドラク

新任のバドヤナキス医師自身がこれを届けて来た。結

局、訪問は出来なかったという。と同時に、必要な場合にのみ、かつその場合くれぐれも慎重に手紙を活用するように頼んでいた。手紙は前任のソルダトス氏に対し含むところがあるのは明らかで、その点がバドヤナキス氏の立場を微妙なものにしていた。

もうひとつの書類は検死報告だった。アドリアナ・ドラクは今日十四日モルヒネの過剰投与により亡くなっていた。

二通の書類以外にゲオルギツアス少尉の前には小瓶が一本あった。ラベルには「炎症止め。一日スプーン匙で二〜六杯。医師の指示に従うこと」と書かれ、右端には「よく振ること」とあった。市販薬ではなく、調合されたものだった。ソルダトス医師が準備したもので、医師は医療行為以外に村人のため調剤も行なっていた。

小瓶には沈殿物がほんのわずか残っていた。化学分析によると通常の咳止めシロップの何倍ものモルヒネが含まれていた。

ゲオルギツアス少尉は額の汗をぬぐった。手紙を読み返し、目の前の小瓶を見やった。

「なんとも」とつぶやいた。「結局、悪事は土地財産がらみで起きるといふことか。なんともな！」

手紙を引き出しにしまい、声を上げた「例のパナギスを呼んでくれ！」

「おい、いいか」小作人が現れるとすぐに訊いた。「アドリアナ夫人にサインした借用書だがな、いつが期限だ？」

「なんですと？」とパナギスは尋ねる。ずる賢そうな青い目は、警官の視線を避けるようにあちこちと泳いだ。ゲオルギツアスは男のことをよく知っていた。仕事の腕は一流。しかし稼ぎは全てプレファ（カード賭博の一種）に注がれていた。

「借用書だよ。いつが期限だ！」

「ああ、借用書ね」相手はうなずいた。

答えるのにしばらく時間が必要だった。期限はあと一ヶ月。しかしパナギスは借金の一部も準備できていなかった。

「で、そうやって」少尉は苛立ちを見せ「ムシヨに送られるくらいなら、ご主人をあの世に送る方がいいと決めたわけだ。違うか？」

「オレは……オレは……」

パナギスは混乱しながらも詳細に語った。自分は非の

打ちどころのない使用人で、アドリアナ奥様のためなら、監獄どころか喜んで地獄にも行く。嘘を言うくらいなら業火に焼かれた方がいい。

「よく聞けよ」とゲオルギツアス。「毒はこの瓶の中に入っていた。お前とアンソデスミだけがあそこに置くことが出来た。他には誰も家に入っていない」

「なんですと」パナギスは言う。「他の誰も家に入らなかったって！ あの日にはアギスさんだって奥さんと一緒に来たじゃないですかい」

「アギス夫妻は応接間に座っただけだ。寝室には全然入らなかった。したがって瓶にモルヒネを入れるのは不可能だ。アドリアナ夫人がこの瓶を持っていたことすら知らない」

パナギスはうつむいた。言われたことが聞こえていないかのように見えた。しかし、ゲオルギツアスに押しこまれて、しばらくしてから突然口を開いた。そのことばに少尉は注意深く耳を傾けた。

その後、ゲオルギツアスはアンソデスミに尋ねた。「この瓶はどこにしまっておいたのかね」

十七歳になったばかりの娘だ。息もつけない生活に苛

立っていた。遮るものをなぎ倒すかののように、頭を前に傾けて重々しく独特の様子で歩く。そのときは顔を紅潮させていた。

「寝室の中です」相手を見ようとせず答えた。

「アドリアナ夫人はよくこのシロップを飲んでいたのでいい？」

「喉が痛い時にです。年に一度か二度咳が止まらなかったのです」

「で、ここ数日は咳が出ていた？」

「いえ。あの日の午後だけです。アギス様とおしゃべりしてたとき。あの方のタバコのせいです。そうおっしゃいました」

「つまり、この瓶は長いこと開けてなかったのかね」

「ええ、十二月に何匙か飲んだだけです」

「何匙かだけ？ それからは一昨日の夜まで飲まなかったのかい？」

ここでアンソデスミは非常に興味あることを語った。

午後アギス夫妻と相談していたとき、アドリアナ夫人は咳をし始めた。アンソデスミにシロップを持ってこさせた。娘は瓶を持って行きコンソールテーブルの上に置いた。

「瓶を下げるために待つてなかったのかね？」

「まあね」と否定した。「すぐに下がるように言われたから。話の内容を聞かれたくないようでした」

「それじゃ三人が何を話したのか知らないんだな」

「まあね」と再び娘は答えた。

少尉は相手のウソを確信していた。「アドリアナ夫人とはうまくいってなかったようだな」

「あたしが？」

「お前だよ。ミツオスと結婚してオーストラリアへ行きなかつたんだらう。だが奥様は許さなかつた」

娘は表情なく少尉を見つめている。

「知らないでも思つたのか？ お前はまだ未成年だから後見人の同意なしには結婚できないし、パスポートも取れない。そうして、亡くなる数時間前にこのことでもたはげしく喧嘩しただらう」

今度はアンソデスミは本当に驚いたようだった。あのことで？ 喧嘩？ でも、アドリアナ奥様はここ何週間も話しかけてくれない。必要な書類にはサインしないし、そのつもりでいるようにとおっしゃったきり……そこでアンソデスミはあきらめることにしたという。

ずいぶんあっさりだな、と少尉は考えた。ずいぶんと

あつさり口にするもんだ。この若さで、しかも何か月もミツオスとつき合っていたのに。

「じゃ、どうして一昨日の夜奥様の部屋で喧嘩したんだ？」

「喧嘩なんて誰が言ったんですか？」

「ほらほら。誰が言ったかなんかはどうでもいい！ どうして喧嘩したか言うんだ」

アンソデスマはパナギスへの呪いの言葉をつぶやいた後、《喧嘩》ではないと説明した。アンソデスマがシロップを渡そうとした瞬間、瓶が手から滑り落ちてかなり床にこぼれてしまったので、アドリアナ夫人はかつとやって——神よ、故人をお赦しを——彼女を叱ったと言う。

「で、どうして手から落ちたんだ」少尉は何かを尋ねなければという思いで言ったが、頭では瓶がずっと置かれていた応接間の様子を思い描いていた。もちろんそこにはアドリアナ夫人がいたが、あるいはもしかして……

「……瓶に書いてあります」その間、アンソデスマは話し続けた。「そうして、あたしは瓶を振ろうとしたんです。なのに、何でか分からないけど奥様が叫んだんです。あたしはビックリして落としちゃいました」

「だが、さつきは休まれる前にスープレで飲ませたとお

前自身が言ったじゃないか」

「ええ、そうですよ」娘は苛立つて言った。「瓶を拭いてから飲ませました。シロップですよ！ 水みたいにすぐに全部こぼれ出るわけないでしょ」

ゲオルギツアスは戦術を変えることにした。ことは最初に思われたほど簡単ではなさそうだ。それに情報は多ければ多いほどいい。おだてたり脅したりして、応接間で正確に話されたことをアンソデスマから聞き出すことにしよう。

残りの必要な情報は村のことなら何でも見知っているディオニシア夫人から仕入れた。

「いいかい」とディオニシア夫人は言う。「ソドロス・ドラコスさんはソルダトス医師の妹さんと結婚していた。アギスはその一人息子だよ。先のドラク夫人は——あの方の魂が安らかに眠らんことを——アドリアナを家の小間使いにしたのさ。両親が貧乏だったのを憐れんでやってね。でもどんなヘビを懐に入れることになるかなんて誰にも分かりやしない。あの女がソドロスさんを丸め込むなんざ、どうして想像できるかね？ 丸め込んだだけじゃない、奥さんと別れさせたんだからね。酷い話さ。」

あんときは大変な騒ぎになった。親戚たちが中に入って頼み込むわ、脅すわ……なんにもなりやしなかった！アドリアナはソドロスの首根っこをつかんでたね。わたしたちは彼女にあいさつもしなかった。でも、あつちは屁とも思っちゃいないさ。そのくらいの騙り屋だった……」

「わかったよ」とゲオルギツアスは遮った。「しかし、どうしてアドリアナはソルダトス医師が妹を殺したなんて言っただらう」

「だって、かわいそうな妹さんは絶望のあまり、医師が戸棚にしまつてある毒で自殺したんだから。そのとき事情を隠さなきゃならなかったんだよ。だって、ほら、自殺したら破門されるだろう。でも自殺したのはみんな知ってることさ。それで、わたしたちはアドリアナを憎しみの目で見っていた。あの女が悪いんだ。で、あの奥方は何をしたか知ってるかい？ 兄が毒を与えたんでないや、なんで警察を呼ばなかったんだ、なんてほざいたものさ。しかも、酷いことに、ソルダトス医師は遺産を横取りするために妹さんを殺した、だと！ その時から、なにかにつけて医師を悪者呼ばわりさ」

署に帰る途中、ゲオルギツアスは新しいドラク夫人シィに出会った。前から道を曲がってくるどころだった。後になって、それがほんとうに偶然だったのかどうか疑いを持ち始めはしたのだが。

「泳ぎですか？」彼女が手にしたタオルを見やって微笑みながら尋ねた。

シィは暗い眼で彼を見た。「ひとりで泳ぐのは好きじゃないんですけど！」

「おひとりで？」

「夫はその気にならないんです。今度の事件でたいそう困っています」

ゲオルギツアスは何やらつぶやいた。

「本当なんですか？」とシィが尋ねる。「モルヒネが咳のシロップの中にあつたって？」

「ええ」

そして少尉は相手の奇妙な表情に気づきながら訊いた。

「どうしてですか？ 何か気がかりがありそうですね」

「いえ、いえ！」シィの口調は激しすぎて、何か隠そうとしているのは明らかだった。

ゲオルギツアスは機会を逃しはしなかった。最後にシィは答えた。

「一昨日の午後、義母と話し合っていたときのことです。主人はタバコを吸ってました。いつもタバコを離さないんです。でも、煙草の匂いが亡くなった義母を苦しめたようです。咳き込み始めました。つまり、その、正直言いますと、周囲を振り回そうとしてたんだと思います。とにかく、ずっと咳をして、あの娘にシロップを持ってくるよう言いつけました。もちろんアギスはすぐに煙草を消しましたけど、あの人の咳は続きました。喉が腫れ上がってしまったようでした。その後、吸い殻の匂いがひどいと言って、アギスに灰皿を台所に下げさせました」

シシーはもう言うことはない、といわんばかりにことばを切った。

「で、ご主人は灰皿を台所に持って行った？」

「故人の薬も一緒に。でも、どうか誤解しないでください……つまり、想像されるようなことじゃないんです……言いたいのは、アギスが薬も一緒に下げたのは、整理整頓にうるさいからなんです。いつだってものを元通りにしておきたがるし、あちこちに散らばってるのを見るのが我慢できない人で、イライラするんです。で、あの娘がコンソールテーブルの上に置きっ放しにしてあつてシロップを、自分で手に取って台所に運んだんです。」

モルヒネが入ってたと今日聞いて私たちはビックリしました。当然でしょ。自分の手で触れたと考えるみてくさいな」

背筋に悪寒が走ったような動きをした。

「亡くなった義母はね」と続けた。「もちろん酷い人でしたよ。はつきり言ってもかまいません。かわいそうなお母様は何でもかんでも我慢して……アギスのお母様の自殺の原因になったばかりじゃなく、その後アギスに献身するフリをしながら父親をそのかして、ソルダトス伯父さんが求めていた子どもの親権を渡さない訴訟をあれこれ起こさせたんですよ。裁判に勝った後は、悪魔のような計略を企てた結果、父親は息子に激昂し、家から追い出して学校の寄宿舎に閉じ込めたんです。ソドロスさんが重い病気にかかって、アドリアナはすぐにはアギスに知らせず、そうやって父親は息子に二度と会うことなく亡くなりました。それでも……」とシシーは最後に付け加えた。「それでも、かわいそうなアギスは彼女を責めませんでした」

そして突然嗚咽にむせいだ。

「おそろしいこと……なんておそろしい……」

「ニュース、聞きたい？」サラダを夫に渡しながらトゥーラは言った。

そして返事も待たずに、「警察はアギスを疑ってるわ！」

「おいおい！」スピロスは驚いて彼女を見た。

「ホントだってば。ほら、全ての材料が集まったわ。動機は——急に価値が出た父親の遺産。機会は——シロツプの瓶を台所へ持って行ったとき」

「謀殺ってことか。あ、でもそうはいかないよ。義母の咳が止まらず、シロツプにモルヒネを混ぜるチャンスがあるって、アギスはどうやって知ったんだい？ ほらほら、考えすぎだ！」

「事件全体がそんな風でしょ。ひとりひとり考えてみましょうよ。パナギスは彼女に借金があった。たしかに。でも、どこでモルヒネを手に入れた？ アンソデスミにしても同じ。ふたりともモルヒネを老魔女の瓶に入れるチャンスはごまんとあったけど、どこで見つけられたかしら？ それに、瓶に入れられたとして、どうして警察に見つけてくださったかって言わなければかりに、枕元に放っておいたの？ シロツプに毒を入れるのがお手のものなら、それを隠すのだって簡単でしょ。」

外部の人を考えてみましょう。まず、医師はいちばん

ありそうにないわね。以前の妹の事件が蒸し返されるのを恐れて？ そうかも。だけど、医師はアドリアナの家には足を踏み入れていない。意図的にしろ、ミスにしろ、準備してやった処方箋に過量が書かれてあった？ でも、じゃなぜ、冬に初めてアドリアナが菓を飲んだとき毒殺されなかったのかしら？

というわけで、医師も却下。

「シシーは？ 看護師だったし医療のことはある程度知ってる。そうね。でも機会がなかったわ。まったく瓶を手にしていないから。」

残ったのは……アギス！」

「で、アギスはどこでモルヒネを見つけたことになるんだ？」

「まず、一番簡単なのは伯父さんの調剤所から。主顔あつらでしょっちゅう出入りしてたから全然難しくないわ。ほかには、アテネから持ってきたという線ね。他人が何をしてくれるか誰でも知ってる村と違って、大都市だからずっと簡単よ」

「あり得るな。そうすると謀殺ということか。アギスはホテル計画で自分に有利なように義理の母親を説得しようとして、或いは始末しようとして決心してロドダフニにや

って来た。コンソールテーブルに置かれたままのシロツプ瓶を見て、チャンス到来とばかりに利用した」

「その通り！ その後瓶を始末しようとしたけど再び家に入れなかったのね。さて、ニュースをもうひとつ教えましょうか？」

「何？」

「シシーはバッグにヨルゴスのハンカチを入れてたの！」

「ヨルゴス？」

「言ったじゃない、先日あの二人がパヴリデイスの喫茶店で知り合ったとき、すぐにシシーは色目を使い始めたって。いえ、すぐってわけじゃない。相手が実業家だつて聞いてからよ。あれからずいぶん発展したんでしょうね。二日経たないうちにうまいこと彼の肩で泣くなんてね」

「で、肩で泣いたって何で分かる？」

「だって圧倒的多数の殿方は女に肩で泣かれると雷に打たれたように恋に落ちるから」

「みごとに推理だ！」

「じゃない？ じゃ、どうしてヨルゴスのハンカチが彼女のバッグにあったの？ この目を見たのよ。かわいそうに、ヨルゴスははっきりとイニシャルを入れてたから」

「いや、貸してやっただけかもしれない、理由はあるだろ、たとえば……たとえば……」

「たとえばなに？ そもそも貸すってことは彼に会った証拠よ。第二に、女性が殿方からハンカチを借りるのは鼻をかむためじゃない。それには自分のを使うでしょ。泣きそうになったときだけよ、借りるのは。泣くとき。」

「わかる？ 作戦ね」

「お前はときどき意地悪になるね」スピロスはイヤミを言った。

「ふん！」トゥーラは鼻を鳴らした。「真実はいつだって意地悪に見えるものよ。とにかくわたしはこのままにはしておかない」

「何の話？」

「今話してることよ！」トゥーラは突然熱くなった。「わかってますとも！ 瓶が床にこぼれたんだから！ どっちにしろ、あの人、何だってそんなこと話すの？ わたしだって看護師の資格を持つてる。でも、酷いことは許さない。それに、あなたのハンカチも明日から数えるわよ、毎日！」

スピロスは立ち上がって体温計を取りに行った。

ソルダトス医師の調剤所の中で、トゥーラは低い声で話していた。家中に声が奇妙に響く。アギスは朝から警察で尋問されていた。シシーは怯えたように暗い眼を見開いてあちこちうろついている。

「誰にも聞かれなければいいんですけど」トゥーラは言った。

「聞かれたって問題はないでしょう？」医師は不思議そうに言った。

二人は部屋に閉じこもり、化学反応とその可能性について話していた。

「ここ何年いつも同じ処方箋を書いてきました」と医師は言う。

それからトゥーラは言った。「絶対、瓶は屋根裏部屋にあるはずですよ」

「明日ゲオルギツアスさんに捜査を依頼しましょう。何も証明できないかも知れない。でも、確かな説明がつくかも知れません」

立ち去りながらトゥーラは満足そうに微笑んだ。秘密めいた様子、閉めきったドアはかならず……とにかく、ふつうの人間なら好奇心を引かれたはずだ。

道の傍らでアンソデスマミが隣人とおしゃべりしていたが、トゥーラが通り過ぎると、横目で見た……

警官たちは夫人の家を辞去していた。今は誰も監視していない。が、中には誰もいない。今や唯一家人のアンソデスマミは一人では寝ないと公言していた。家は<sup>ひとけ</sup>人氣がなかった。薄暗かった。

——下の部屋を探す必要はない。たぶん台所の中か？すばやく目を走らせた。いや、やはりそこにはなかった。

上るにつれて階段が軋んだ。まず寝室へ。それから上の屋根裏部屋。……何に触れても手が埃まみれになった。長い年月の間に積もった埃。

諦めず探し続ける。捨てたはずはない。誰も瓶をゴミ箱に捨てたりはしない。

そして突然目前に現われた。一列に並んでいる。全く同じラベル。同じ文字で『よく振ること』。

すばやく別の瓶を取り出す。最初の瓶にアルコールを少し入れる。静かに振って、濁った液はおが屑の詰まっ

た古い木箱に空けた。二番目の瓶を取ってこれも洗う。そうして三番目も……

突然強い光が彼女の顔に射した。

ゲオルギツアス少尉の声が雷のように響く。「殺人事件での重要証拠品の隠滅は……」

「えい！」トウーラは手袋をソファに放り投げた。「あははは！」

スピロスは書類から顔を上げた。「どこかで聞いたな」とため息をついた。

「ニュース聞いた？」トウーラは興奮気味に手をこすり合わせる。「シシーが逮捕されたわ！」

「アドリアナ殺害でか？」

「違うわよ！ アルコールで念入りに空のシロップ瓶をすすいでいたから。あははは！ 言ったとおりでしょ！ 危険な女だって。やっぱりずる賢かった。でも今回は失敗したわね。欲張りすぎると……わかるわね？」

「いや、全然」

「アギスを牢獄に閉じ込めるアイデアを思いついたのよ。彼女自身の役割ときたらこれがもう！ 殺人犯と結婚し

てしまった憐れな女性！ 殿方、はやく慰めにいらして！ で、さっさとヨルゴスと再婚。だってねえ、あなた、結局人がハンカチを貸すのはごくごく親しい相手で、涙をこぼす女と結婚することになるのよ。でもヨルゴスと結婚できなくても得るものはあるわ。アギスは牢獄で彼女は外。財産は彼女の手の中。ほらほら悪くないでしょ！ 少尉を見かけると『あの、ちよつと……』、ヨルゴスには『実はその……』。そうやって、かわいそうなアギスの首をぐるりと縄でしばることになったでしょうよ」

「かわいそうだって？ けど、お前、昨日の話じゃ……」  
「わたしは何にも言っていないわよ。あっちこっちの噂を教えてあげただけ。どうだろう？ 今度のことは罰金で逃れることになるのかな？ 洗った瓶のこと」

「でもどうして洗ってたんだ？」

「底の澱の中のモルヒネ濃度が上がってるのを知られないため。わたしがソルダトス医師と話すのをドアの後ろで聞いてて、すぐに証拠を消そうとしたのよ」

「待て待て！ まず誰がどうやって殺したのか説明してくれ」

「誰も殺してないわ！ 誰もね。むしろ、老魔女の妖術

が殺人を行なったんだわ。瓶の上には『よく振ること』  
って書いてあった。どうしてか？ 簡単に言うけどね、処  
方箋の残りの成分によってモルヒネが沈殿するからよ。  
アンソデスマスが瓶を振ろうとしたとき、アドリアナが叫  
び声をあげた。瓶が落ちてこぼれてしまった。残ったも  
のと言えば……溶けていない沈殿物。致死量のモルヒネ  
が入ったやつね」

しばらく夢見るような目つきをしてから言った。「保  
釈金なんかで済まないといけどね。喜んで牢屋の彼女  
にハンカチを差し入れてあげるから。涙を拭く大きなハ  
ンカチを半ダースほどね」

### 【注】

一ペロポネソス半島北岸の小さな町で、作者の故郷。パトラ市か  
ら東へ三〇キロにあり、近くに海水浴場が広がる。

二人物関係が少しややこしいので、重要人物のみ簡単にまとめ  
ると次のようになる。

アドリアナ・ドラク夫人   ドラコス氏の後妻  
ソドロス・ドラコス氏   故人。アギスの実父

アギス   ドラコス氏の一人息子

シンシー   アギスの妻

ソルダトス医師   ソドロス氏の最初の妻（故人）の兄

三「白人の子供よ、おいで……」は、童謡「ギタリスト」の一  
節。難破してアフリカの海岸に流れ着いたギタリストが野生の  
女王に食べられそうになるが、音楽で救われるという内容。

### 【解説】

『ギリシヤ・ミステリの父』ヤニス・マリスは一九五三  
年に『コロナキの犯罪』でデビューし、最初のミステリ  
興隆期を作り出したが、同時代に活躍したミステリ作家  
たちは、今日作品がほとんど再版されることもなく、歴  
史的価値を持つにとどまっている。しかし、ただ一人、  
マリスにやや遅れてデビューしながらも、一般文学・歴  
史文学に活動領域を広げながら、今日大御所作家として  
尊敬されている人物がいる。初めてのギリシヤ・ミステ  
リ女流作家アシナ・カクリ *Ασινα Κακρούρη* である。

カクリ女史は一九二八年（ペロポネソス半島北岸の）  
パトラ市に生まれまた。もともと、アガサ・クリステイ  
が好きで、ミス・マーブルを思わせる主婦トゥーラを主  
人公にした短編を書きあげ大手新聞『タ・ネア』に送っ

てみたが、返事はなかった。その後、週刊誌《郵便夫》に注目され、一九五〇年代から六〇年代にかけて多くの短編を発表した。長編ミステリは『幽霊狩人 *Kovnγός φαντασμάτων*』（一九七三年）一作きりなので短編専門と言える。雑誌掲載短編をまとめて出版した短編集『ピスタチオと塩 *Αλάτι στα φαστίκια*』（一九七四年）は絶版だが、二〇〇〇年から二〇〇一年にかけて出された『流行の犯罪 *Εγκλήματα της μόδας*』『悪魔の園 *Οι κήποι του διαβόλου*』『切られた首 *Η κομμένη κεφαλή*』の三冊の再編集もので当時の代表作を読むことができる。（それぞれ十三、四編を収録。）

カクリのシリーズキャラとして、ゲラキス警部、トゥーラ夫人、国際警察官ダポンテの三人が活躍するが、扱う事件も分業されている。

カクリ女史は現在、ミステリ専門誌《CLM》創刊号でインタビューを受けるほどギリシャ・ミステリ界の重鎮の地位にあるが、実はすでに一九七〇年代から数多くの普通小説、歴史小説を発表している。ペロポネソス半島の特産品干しブドウの運搬船の物語『プリマロリア *Πριμαρόλια*』（一九九八年）や一九二一三年のバルカン戦争に従軍した女性を主人公とする長編『セクリ *Θέκλιη*』

（二〇〇五年）によって「ニキフォロス・ヴレタコス賞」や「アテネ学士院ペトロス・ハリス財団散文賞」などの文学賞を受賞している。最近も執筆意欲はますます盛んで、第一次世界大戦参戦をめぐる対立し国家を二分したコンスタンディノス王とヴェニゼロス首相を扱う『二人のベータ *Ta δύο βήτα*』（二〇一六年）や十九世紀初めのギリシャ独立戦争を描く『一八二一年ー終わらざる始まり *1821 Η αρχή που δεν ολοκληρώθηκε*』（二〇一三年）なども資料を渉猟して書き上げた力作である。

ここにご紹介する「涙のためのハンカチ *Ένα παντίλι για δάκρυα*」はエステティア社の『悪魔の園』（二〇〇一年）に再録された短編である。大掛かりな謎ではないものの、登場人物（犯罪者に限らない）に対する辛辣な視点という作者の特徴がよく出ている。薬瓶を探して屋根裏部屋へ上る人物や魔女と呼ばれた吝嗇な犠牲者などなかなか印象に残る。

六十年近く前の作品だが、作者も愛着を感じていたように、ギリシャのラジオ局「九〇二左派」<sup>αριστερά</sup>のミステリ・ドラマ・シリーズ「泥棒と警察九〇二」に再登場する。このラジオ局はギリシャ共産党所属の組織で（九〇二は周波数からの命名）、現在は「902.gr Web Radio」の名で

ネット配信されている。ラジオドラマ版でもストーリーや登場人物はほとんど変更がないが、当時の時代背景を知らないギリシヤの若い視聴者のために、次のような簡単な導入が付け加えられている。

「五十年前。以下に語られる物語が起きた頃、大部分の薬は医者の方から従って薬剤師が調合していた。また、アテネやいくつかの町を除き、警察は住民の安全に気を配っていた。さらに、人々は何でも手当たり次第にゴミ箱に捨てる、ということにはなかった。

トゥーラ夫人はパトラに住んでいた。精神科医がいなしいこともあって、人々が苦しみを打ち明け、過ちを告白しようと押し寄せ来て、トゥーラは人の本性とあらゆるゴシップに通じることになった。

その他の点では、トゥーラは人のいい弁護士スピロスと幸せに暮らしていた。

一九五六年七月のその夜、スピロスは早めに帰宅し、厄介な訴訟書類を静かに読むつもりだった。そこへ書斎のドアが勢いよく開き、妻が笑いながら入ってきた」

また、結末のトゥーラ夫人のことは、ラジオドラマ

版の方がいいと思われるので、翻訳ではそちらを採用した。もとの『悪魔の園』では「喜んで牢屋にタバコを差し入れてあげるわ」となっている。

今回の和訳を快く認めて下さったアシナ・カクリ氏 (Κα Αθηνά Kakouρη) とエステイア社のフリスティナ・セオハリ氏 (Κα Χριστίνα Θεοχάκη) に心からお礼申し上げます。